

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 18 号

平成 15 年 10 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

印刷・発送人 〒285-0844 佐倉市上志津原 34 佐藤れん

電話 043-487-7030

内村鑑三「一日一生」より(2)

2 月 22 日

しかし事実、キリストは眠っている者の初穂(はつほ)として、死人の中からよみがえったのである。それは、死がひとりの人によってきたのだから、死人の復活もまた、ひとりの人によってこなければならぬ。アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。(コリント第一書 15・20 - 22)

信者が復活するのではない、彼のうちに住みたまうイエスが復活するのである。彼は義によりて生きたもうのである。しかしイエスは信者のうちにありて復活したもうて、信者と共に復活したもうのである。信者はイエスの復活の同伴にあずかるのである。彼と共に挙げらるるのである。「われ生くればなんじらも生くべし」と彼が言いたまいしはこのことである(ヨハネ伝 14・19)。かくて信者の復活に、あえて不思議なところはないのである。イエスの復活が当然であり自然であるごとくに、信者の復活もまた当然であり、自然であるのである。

2月28日

また救いのかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち神の言を取りなさい。絶えず祈りと願いをし、どんな時でも御霊によって祈り、そのために目をさましてうむことがなく、すべての聖徒のために祈りつづけなさい。(エペソ書6・17 - 18)

キリストにおける信仰は余を罪より救うものなり。されども信仰もまた神の賜物なり(エペソ2・8)。余は信じて救われるのみならず、また信ぜしめられて救われる者なり。ここにおいてか余はまったく自身を救う力なき者なるを悟れり。さらば余は何をなさんか。余は余の信仰をも神より求むるのみ。キリスト信徒は絶え間なく祈るべきなり。しかり、彼の生命は祈祷なり。彼は不完全なれば祈るべきなり。彼なほ信仰たらざれば祈るべきなり。彼よく祈りあたわざれば祈るべきなり。恵まるるも祈るべし、呪われるも祈るべし。天の高きに上げらるるも、陰府(よみ)の低きに下げらるるもわれは祈らん。力なきわれ、わが能うことは祈ることのみ。

3月14日

イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変わることがない。さまざまな違った教えによって、迷わされてはならない。(ヘブル13・8 - 9)

われ史をひもときて、国は興きてまた亡び、民はさかえてまた衰うるを読む。ただ見る一物の、時代の敗壞の中において、巍然(きぜん)として天に向かって聳(そびゆる)あるを。キリストの十字架これなり。世は移り人は変るとも、十字架はその光輝をはなちてやまず。万物ことごとく零碎(れいさい)に帰する時に、これのみはひとりのこりて世を照さん。十字架は歴史の中枢なり。人生のよって立つ磐石(ばんじゃく)なり。これによるにあらざれば鞏固(きょうこ)なることあるなし、永生あるなし。十字架をのぞいて他はみなことごとく蜉蝣(ふゆう)なり。キリストのみがきわまりなくたもつ者なり。

3月15日

主よ、あなたがもし、もろもろの不義に目をとめられるならば、
主よ、だれが立つことができますでしょうか。しかしあなたには、ゆるしがあるので、人に恐れかしくまれるでしょう。わたしは主を待ち望みます、わが魂は待ち望みます。そのみ言葉によって、私は望みをいただきます。わが魂は夜回りが暁を待つにまさり、夜回りが暁を待つにまさって主を待ち望みます。(詩篇130・3 - 6)

わがうちを省みてかしこに何の善きものはない。そこにあるものは汚穢、悪念、邪慾、貪婪(どんらん)のみである。もしわれみずからこれを取り払うにあらざれば、われは神にちかづくあたわずとなれば、われは到底神に近づくことのできない者である。しかしながら神はわが罪よりも大である。彼はわれの罪あるにかかわらず、われを救いたもう。すなわち彼はわがためにわが罪を殺して、われを彼の属(もの)となしたもう。われの救拯(すくい)の希望は単に神の恩恵(めぐみ)に存している。彼にしてわれを恵みたもうにあらざれば、われの救わるる希望は一つもない。

3月22日

私は、すでに自身を犠牲としてささげている。私が世を去るべき時は来た。私は戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。いまや義の冠が私を待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりでなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。(テモテ第二書 4・6 - 8)

信者は神の僕である。主人より特殊の要務をゆだねられたる者である。ゆえに彼はこの要務をはたすまでは死すべきでない。しかし彼はその時まで決して死なないのである。リビングストン(注1)のいいし「われらは天職をおわるまでは不滅なるがごとし」との言は信者の確信である。彼になお天職の完成せざるものがあれば、彼は死なないのである。されども彼が、もしすでにはたすべきの事をはたしおわりしならば、彼は死ぬるのである。彼は長寿の希求(ねがい)をもって神にせまりてはならない。すでに用なき者はこの世にながらえるの必要はないのである。「何ぞいたずらに地をふさがんや」(注2)である(ルカ伝13・7)。僕は主人の用をはたせばそれで去つてよいのである。彼は心にいうべきである、われは長く生きんことを欲せず、われはただわが主の用をなさんと欲すと。

注1 デヴィッド・リビングストン(1813 - 1873) イギリスのアフリカ探検家

3月27日

エノクは65歳になってメトセラを生んだ。エノクはメトセラを生んだ後、三百年、神とともに歩み、男子と女子を生んだ。エノクの年は合わせて365歳であった。エノクは神とともに歩み、神が彼を取られたので、いなくなった。(創世記5・21 - 24)

「歩む」とは「静かに歩む」の意である。飛ぶにあらず、走るにあらず、歩むのである。雄飛というがごとき、疾走というがごとき、絶叫というがごとき事をなさずして、忍耐をもって神により頼み、その命にしたがって静かに日々の生涯を送ることである。あえて大事業を成さんとせず、大伝道を試みんとせず、大奇跡を行わんとせず、ただ神の命これ重んじ、神の言これしたがい、神を信ずるこれ事業なりと信じて、無為に類する生涯を送ることである、信仰の生涯の大部分は忍耐である。静粛である、待望である。神にありて自己に足るの生涯である。また神より何物をも受くることなきも、かれご自身を賜りしがゆえに、その他を要求せざる生涯である。

4月7日

そこで、高慢にならないように、私の肉体に一つのとげが与えられた。それは高慢にならないように、わたしを打つサタンの使いなのである。このことについて、私は彼を離れ去らせて下さるようにと、三度も主に祈った。ところが、主が言われた、「私のめぐみはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全に現れる。」。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。(コリント第2書12・7-9)

もっともよき聖書の注解はバーンズにあらず、マイヤーにあらず、クラークにあらず、もっともよき聖書の注解は、人生の実験そのものなり。これなからんか、すべての学識、すべての修養をもってするも、聖書の根本的狭義をさぐるあたわず。これあらんか、いろは四十八文字を読みえば、聖書の示す神の奥義を知るにかたからず。教会より放逐され、国人に迫害され、友人の裏切りするところとなりて、吾人は始めてキリスト教の真髓なる十字架の何たるかを知るをうべし、聖書が神の書たるの確証は、それが学識の書にあらずして実験の書たるに存す。

4月18日

わたしたちは、この望みによって救われているのである。しかし、目に見える望みは望みではない。なぜなら、現に見ていることを、どうしてなお望む人があるのか。もし、わたしたちが見ないことを望むなら、わたしたちは忍耐して、それを待ち望むのである。御霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けて下さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである。そして、人の心を探り知る方は、御霊の思うところが何であるかを知っておられる。なぜなら、御霊は、聖徒のために、神の御旨にかなうとりなしをして下さるからである。(ローマ書8・24 - 27)

神は聖霊として人の霊にのぞみたもう。聖霊として光を供し、聖霊として脳(ちから)を加え、聖霊として万事をとげたもう。聖霊によりてである。信者は聖霊によらずして何事もなすことができない。彼は聖霊によりて祈り、聖霊によりて万事をたずね知る。神の能なる聖霊によりて神にいたり、神の光なる聖霊によりて神を知る。キリスト信者は元来他動的である、自動的でない。上より求められし者であって、下より求めし者ではない。彼の信仰そのものさえ聖霊によりて起されしものであって、かれみずから求めて起りしものではない。聖霊によりてである。